平成１４年９月１日発行

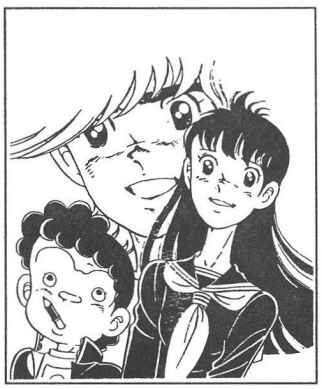
かまぢし

発　行　わがまち大田蒲田西地区推進委員会
編　集　地域情報紙編集委員会

第5号

わがまちの顔

漫画家　石井　いさみさん



相生小学校、御園中学校出身で西蒲田を活動拠点とする漫画家がいる。７０年代～８０年代にかけ、爆発的にヒットした「７５０ライダー」で知られる石井いさみ氏である。

幼い頃の思い出は、昭和２０年３月の東京大空襲。「家に火がついたぞ！これで最後だぞ！よく見とけ。」と父に言われたことが印象深く残っているという。

戦後まもない相生小学校時代のことを石井氏は次のように語る。

「音楽会で六郷の小学校に行きましたが、その時歌った灯台守の歌は悲しく、今でも忘れられない思い出です。漫画家を志したきっかけは、相生小の図工の宮本先生の『石井は絵がうまいから、東京都の展覧会に出品してみろ』という一言。テーマは５０年後の東京を描くというもので、最優秀都知事賞に選ばれ、朝礼の時に賞状をもらって・・、そんな訳で間違って絵描きの道に入ってしまいました。（笑）」

当時の蒲田駅付近にはまだヤミ市があった。今に比べると、大人にも子供にも生きるたくましさを感じさせる街、働いている大人の姿を体で感じる街だったそうである。

７５０ライダーを描いたきっかけは、石井氏自身が西蒲田で生まれ育った原体験。自分自身の夢・理想の青春像・青春への後悔などを７５０ライダーに託したのだという。

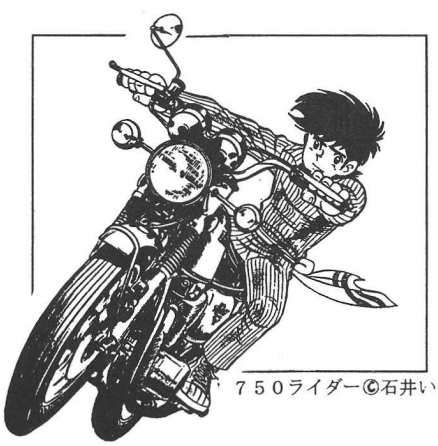
７５０ライダーの舞台は西蒲田である。主人公の光が７５０で走るのは多摩堤通り。待ち合わせはいつも多摩川大橋。羽田空港に行ったり、海に行く話は江ノ島・鎌倉というように西蒲田を中心に描かれている。

７０年代半ばから１０年間週刊少年チャンピオンに連載された７５０ライダー。今あらためて月刊オートバイに再連載され、台湾とタイでもリメーク連載中である。

最後に、石井氏の西蒲田への想いをお聞きした。

「多種多様な人間がいるのが蒲田の魅力です。しかもそれぞれがどういう職種に就いていても高い技術を持っている。これが蒲田の魅力であり、蒲田の誇りと言えるのではないでしょうか。」と胸を張っておられました。

（取材　伊藤・柳通・事務局）



７５０ライダー©石井いさみ

特集「多摩川そのⅡ」

第二京濱國道と多摩川大橋

夜霧の第二国道

昭和三十年代に「有楽町で逢いましょう」や「西銀座駅前」「羽田発七時五十分」等、かずかずのヒット曲を放ち、一躍トップスターの座を獲得したフランク永井という歌手の名を、中年以降の方ならばご存知のことと思います。その歌唱法は「魅惑の低音」と呼ばれ都会的でモダンなフィーリングが持ち味で、多くのファンを魅了しました。

そのレパートリーの中に、悲恋の傷心を第二京浜国道に逃避する「夜霧の第二国道」（宮川哲夫作詞／吉田正作曲・昭和三十一年作品）という曲があります。

かねてより建設工事中であった第二京浜国道の横浜市鶴見区の響橋（通称めがね橋）付近をイメージした歌で、昭和三十三年の全線開通に合わせるように爆発的にヒット。歌とともに、その斬新な構造の国道も一躍脚光を浴びたのです。

第二京浜国道ができる以前は、馬込の台地は九十九谷（つづらだに）といわれ起伏の多いところで、台地を切り開く工事は大変な労力と費用がかかり、当初は建設に踏み切る条件が整っておらず、ただ台地をぬって牛馬が通れる程度の道が五反田から多摩川までできていました。

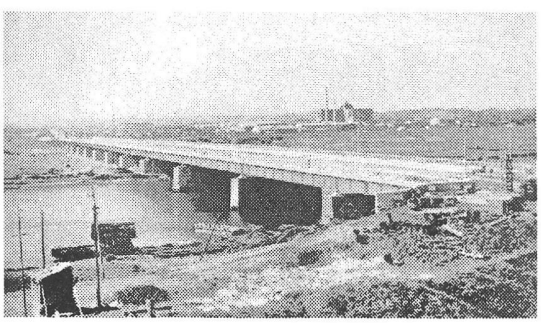
新国道の建設

昭和九年（1934）一月、内務省土木会議道路部会で、第一京浜国道とは別に京浜間を連絡する国道新線として建設計画が決定されました。東京市麹町区外桜田町より東京市蒲田区古市町（現在の多摩川二丁目、矢口三丁目付近）を経由して、横浜市神奈川区神奈川一丁目に至る、都心から放射状に延びる内陸部を利用した道路でした。建設理由として、既に供用している第一京浜国道は、昭和二年（1927）に完成した道路でしたが、その頃から京浜両都市間の人口が急増。同時に物流が活発化したため国道は飽和状態に達してしまったのです。しかも自動車、牛・馬、荷車、自転車等、速度の違う車が国道の同一区分帯を共用しているので、一層交通状態を混乱させていたのです。そこで、速度に応じた通行区分帯を設置した国道がどうしても必要だったのです。

このようないきさつで第二京浜国道の建設工事は東京市荏原区戸越から多摩川までの工事を内務省東京土木出張所が、多摩川から横浜までの工事を内務省横浜土木出張所が担当。東京・横浜両方から、昭和十一年十月、同時に着手されました。総延長一八、三九二m、総工費一、三〇〇万円、六年計画でした。

昭和24年頃の第二京浜国道
馬込橋付近、緑地帯が見える

その構造や設備は、当時の土木技術の粋を駆使した斬新な工法を取り入れ、道路の幅員は第一京浜国道より三m広く、西大崎から多摩川大橋までが二十五m。川崎から先の横浜側は二十二mでした。歩車道の区別はもちろん、速度に応じた区分帯を設け効率よいスピードアップを計りました。車道の中央側には上下六mずつの高速車道を特設。また、高速車道の両側には幅一mずつの緑樹の緩衝帯を設け、この緑地帯の外側は三・五mの



建設中の多摩川大橋

低速車用道路とし、自動車、牛・馬、荷車、自転車等の通行にあてました。

また、電信、電話、電灯用の配線の工事では、全て低速車用の車線の地下に埋設することとし、排水設備は車道の両側に側溝を設置。これを歩道の中央に埋設した陶管の配水管に集中導水する方法を取り入れました。また、交通事故防止対策として、全区間において半径五百m以下の急カーブをなくし、直線に近い構造になっています。

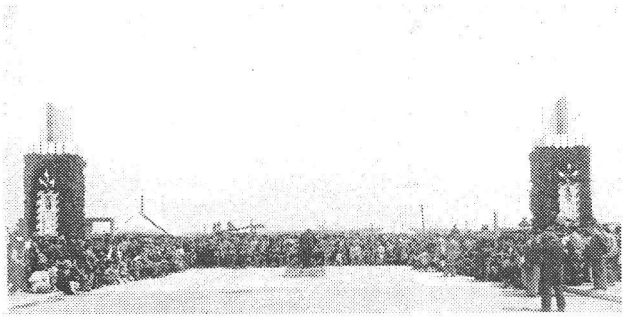
このような長距離の道路に、最新の設備を設けたのは日本初の試みであり、これが完成することによって京浜間の交通は著しくスピードアップ。東京・横浜の両市をつなぐ新経済道路として、大きく物流に貢献しました。

西大崎から多摩川大橋までは品鶴貨物線（現在の横須賀線）、環状七号線、池上線、多摩川線と交わる箇所がありますが、全て立体交差とし、横浜市鶴見区の響橋はモダンなアーチ型の陸橋にし、安全に対する配慮がとられたのです。

環状七号線と交差する地点に松原橋が架けられましたが、架橋工事は昭和十二年九月に着工、昭和十五年四月に完成しました。日本で最初のループ式立体交差で、当時としては画期的なデザインの交差点でした。

不運の木造橋

一方、蒲田区古市町と川崎市古市場町に架かる多摩川大橋は、工事区間中最大の橋として、昭和十三年に着工。同十七年には橋脚部が完成したのですが、戦局の悪化に伴い工費に不足を生じたうえ、鋼材の入手が困難となり当初計画を変更。木造の仮橋を架けることとなりました。その架橋はわずか幅六mで、昭和二十年三月三十一日に完成。供用を開始しましたが、翌四月十五日、米軍機による京浜地区の大空襲により、わずか半月で焼失してしまったのです。



多摩川大橋の開通式（昭和24年4月）

戦争終結後の昭和二十一年には、当初の計画どおり鋼鉄の橋を架けることとなり、翌二十二年着工。同二十四年三月三十一日に完成しました。それが、現在の多摩川大橋で、翌四月三十日には三世代の夫婦、二組の家族が渡り初めをして、盛大な開通式が行なわれました。

第二京浜国道の建設工事は東京市側が昭和十六年に完成しました。しかし、神奈川県側は戦争の影響で工事が延期され、完成は戦後に持ち越されました。全線開通は昭和三十三年三月のことでした。

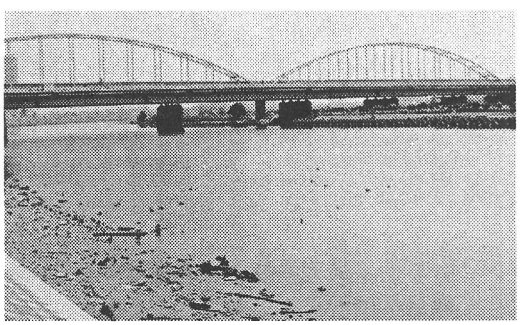
昭和三十五年（1960）、急激な交通量の増加に伴い、全国に誇っていた緑樹の緩衝帯を撤去して片側三車線、上下六車線の自動車専用道路に改修。京浜間の大動脈として本格的にその役割を開始しました。

第二京浜国道は、環状七号線や環状八号線と直結しているため、大田区の交通体系を画期的に改善。地域間の移動時間の短縮、広域的な人や物の交流が飛躍的に拡大。経済活動の活性化や活力ある地域作りにも大いに貢献しました。戦後のわが国の高度経済成長を語る時、第二京浜国道をなくしては語れないといっても過言ではありません。

ちょうどこの頃でした。フランク永井が歌う「夜霧の第二国道」が大ヒットしたのは。

♪闇を片手にハンドル切ればサインボードの灯りも暗い。泣かぬつもりの男の胸を、濡らす夜霧のああ・・・第二国道♪

（取材　滝口、市石、杉野、伊藤、柳通）



現在の多摩川大橋

皆さんとの会話を大切に

西蒲田女塚町会長　渡邊　信雄

当町会は、西蒲田五丁目ほぼ全域と六丁目の一部から成っています。名称は現在の住居表示が定められる以前から皆さんに親しまれていた地名を残す意味で女塚とつけられたものです。その由来は鎌倉時代にさかのぼり、南北朝の争いに起因する七つの塚にまつわると言われています。

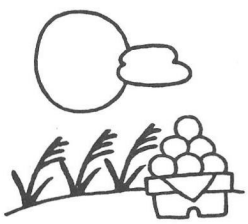
星移り、年変わり、時代とともに伝統的な町工場が減少し、住みよい当地にアパート、マンションが増加。ＪＲ蒲田駅や商店街に至近距離にあることなどからベッドタウンと化しました。

町内には、大城通りと女塚通りがＪＲ蒲田駅に向かって伸びており、鎌倉六百五十年の歴史ある女塚神社（本紙二号詳述）の森や大正十五年に開校された相生小学校（開校当時は蒲田町立尋常小学校）があります。

女塚は良好な住宅地として整っていることで知られ、近くにＪＲ線、東急線、京急線、さらには羽田空港があり交通は万全です。ＪＲ蒲田駅を中心とした商店街や公的機関、病院にも近く、優良な住宅地が形成されています。法的な建築制限から見ても、将来はさらに住みやすい理想的な住宅地として発展していく可能性があります。ただし、リスクもあります。地盤が軟弱で、災害時に液状化の恐れがあります。さらに、曲がりくねった細い道路など。

１７８０世帯・３１１６名が住む私たちの町会は、地域が狭く、アパート等が多いので町会加入割合を向上させることが大切と考えています。役員一同、住みやすい街をつくる意識を持って、ふれあいと創意工夫を目標に努力しています。

町会の行事や会合を通じて、地域の皆さんとの会話を大切にしていきたい。そして街をお互いにより深く知っていきましょう。このことが住みやすい女塚発展の第一歩と思います。



蒲田西地区自治会連合会からのお知らせ

蒲田西地区自治会連合会は、（財）自治総合センターからのコミュニティ助成事業補助金（二百五十万円）で、全ての自治会・町会に地域の自主的活動のための物品を購入しました。

この補助金は、地域住民のコミュニティ組織に対し、宝くじ受託事業収入を財源として、その活動の健全な発展を図ることを目的として助成されたものです。購入した物品には、次のようなシールを貼って皆さんにお知らせしていきます。

宝くじは豊かさ築くチカラ持ち。

蒲田西特別出張所管内

人口	男	29，618人
	女	27，279人
	計	56，897人
世帯		28，757世帯

平成14年8月1日現在

編集後記

今回のわがまちの顔では、西蒲田で生まれ育った石井氏ならではの、誇りと魅力あふれるお話を伺うことができました。

特集では多摩川第二弾として、第二京浜国道と多摩川大橋を取り上げました。できたばかりの橋が燃えてしまった日のことを多摩川二丁目在住のＹさんは、「学校裏（現在の平和島駅付近）の方から燃え広がり、池上、多摩川と逃げてきた人でいっぱいだった橋の両側に、米軍機が焼夷弾を落とし、逃げ惑う大勢の人と共に焼け落ちていった。」と昨日のことのように話してくれました。なお、使用した写真の一部は亡き義父が多摩川大橋建設に携わった関係で我が家にあったものです。今回、皆様に見ていただき、義父も喜んでいることと思います。なお、渡り初めをしたご家族に心当たりの方はご一報下さい。（文責、市石）

情報紙に対するご意見・ご感想などを事務局までお寄せください。

事務局　蒲田西特別出張所
大田区西蒲田七―十二―七
三七三二―四七八五